

# 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC : International Coalition of Library Consortia) ボストン大会参加報告

藤田 儒聖, 庄 ゆかり, 井上 修

抄録：本会合への参加は、わが国の大学図書館界として、北米会合の第12回（ナッシュビル大会）、14回（ラホーヤ大会）、15回（ニューオリンズ大会）、欧州会合の第6回（バルセロナ大会）に続くものである。今回は、文献情報データベース、電子コンテンツの保存や管理、各館のコレクション分析、紙媒体資料の共同保存あるいは保存書庫問題、利用者の満足度調査の意義など、幅広いテーマが取り上げられ、また、電子ジャーナルを中核とする学術文献を取り巻く環境の変化、特にオープンアクセス化の動向などについての議論が行われた。ここに、その概略を報告する。

キーワード：図書館コンソーシアム、国際図書館コンソーシアム連合、ICOLC、電子情報資源、書誌データベース、機関リポジトリ、コレクション分析、電子ジャーナル、オープンアクセスジャーナル、資源共有

## 1. はじめに

このたび、国公私立大学図書館協力委員会、国立大学図書館協会及び広島大学の派遣事業の一環として、2005年4月11日から13日にかけて米国で開催された国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC : International Coalition of Library Consortia)<sup>1)</sup> のボストン大会<sup>2)</sup> に参加した。本会合への参加は、わが国の大学図書館界として、北米会合の第12回（ナッシュビル大会）<sup>3)</sup>、14回（ラホーヤ大会）<sup>4)</sup>、15回（ニューオリンズ大会）<sup>5)</sup>、欧州会合の第6回（バルセロナ大会）<sup>6)</sup> に続くものである。以下にその概要を報告する。

## 2. 開催状況

会議名：国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC) ボストン大会

開催日：2005年4月11日～13日

開催場所：オムニパーカーハウス（米国ボストン市）

参加者：123名。（内訳：米国95名、カナダ11名、日本4名、ポルトガル2名、チェコ2名、スペイン、ポーランド、南アフリカ、オーストラリア、インド、ドイツ、スウェーデン、オランダ、イギリス各1名。）

## 3. アジェンダ（議題一覧）

4月11日（月）

- (1) 運営会議
- (2) グリル1 SCOPUS
- (3) グリル2 Google Scholar
- (4) 全体討議1 検索エンジンの比較・評価に

ついて

(5) グリル3 American Psychological Association

(6) テーマ別討議1

- (A) 利用者のニーズと満足度の測定について
- (B) コレクション分析について

4月12日（火）

(1) グリル4 Center for Research Libraries

(2) グリル5 Bepress

(3) グリル6 CONTENTdm

(4) 全体討議2 電子コンテンツの管理について

(5) グリル7 WorldCat Collection Analysis

(6) グリル8 SpectraCRC

(7) テーマ別討議2

- (C) 資料の共同保存について
- (D) Big Dealの教訓

4月13日（水）

(1) 全体討議3 電子ジャーナルの変容と諸問題

(2) 全体討議4 統合検索エンジンについて

(3) 運営会議2

## 4. 議事

### 4.1 グリル (Grill)

#### 4.1.1 SCOPUS<sup>7)</sup>

(概要)

- ・ 14,000誌以上のジャーナルを収録するElsevier社の文献情報データベース。
- ・ 研究者の研究活動分析を開発の基礎とする。
- ・ 抄録・引用データを含み、科学・技術・医学・社会科学分野の査読された科学文献の約80%をカバー、フルテキストへもリンク。
- ・ ICOLC総会時点での顧客は、コンソーシアム

と各機関をあわせ130機関。

(価格)

- ・ 購入価格はFTE (学部学生および大学院生の合計数) による。
- ・ FTE 5,000-40,000の機関に対する年間価格は表1の通り。

表1 SCOPUS購入価格

FTE	年間価格
5,000-10,000	\$50,000
10,000-15,000	\$70,000
15,000-25,000	\$100,000
25,000-40,000	\$150,000

- ・ FTEでは規模がはかりにくい研究機関に対しては、個別に価格協議が行われる。
- ・ コンソーシアムに対しては、その規模や契約期間など様々な条件を踏まえて価格を設定。
- ・ 現在早期特別割引価格が提示されており、1年分の料金で2年半利用可能。

(質疑応答)

Q. なぜFTEではなく、研究者数を購入価格算定の基準にしないのか。

A. SCOPUSには幅広いデータが収録されているので、該当機関に所属する学生全員に利用されると考える。研究図書館の利用者のうち、誰が利用し誰が利用しないかを判断するのは困難である。

Q. 都市型の大規模公共図書館が研究図書館としての機能も果たす場合は、どう考えるのか。

A. 現在この問題についてある公共図書館と協議中である。他館とも喜んで協議に応じる。

Q. 早期割引価格は取次代理店からの申込でも適用されるか。

A. Elsevier社を通しての契約に限り、特別価格適用となる。必要であれば、個々の図書館にも対応する。

\*各コンソーシアムから価格についての質問があったが、上記設定に必ずしも当てはまらないコンソーシアムに対しては、個別協議になるとの回答。

Q. Google Scholarとコンテンツの重複はないか。

A. Google ScholarはWeb上を検索するものなので、Web上で利用できるPubMed, フリーアクセス可能なデータベースなどに含まれる情報が対象となる。従って、おそらく7,000タイトルの雑誌をカバーしていると思われるが体系的なサービスではない。

SCOPUSは際立った機能を採用し、異なった情報検索環境を提供する。

#### 4.1.2 Google Scholar<sup>8)</sup>

Googleの企業哲学、組織、運営等を紹介。Google PrintとGoogle Scholarについて説明。

< Google Print<sup>9)</sup> >

- ・ 出版社・図書館の協力の下、デジタル化した図書資料をWebで提供する。利用者はWorldCatを通して、具体的な所蔵館を知ることが可能。
- ・ 1923年以前にアメリカで出版された資料については全文閲覧可能、テキスト全体が検索対象となる。WorldCatを通じて所蔵館の検索可能。また、著作権に留意する必要がある資料については、許可された一部分、及び資料の中である語句が出現する頻度とその文章の断片(図書館資料の場合は3箇所に限られる)を見ることができる。

< Google Scholar >

- ・ 研究分野・資料種類などを限定せず検索できる学術文献専用の無料サーチエンジン。
- ・ 検索結果は引用状況をもとにランキングされ、上位の文献から表示。
- ・ 検索結果と図書館(所蔵資料)を直結する試験的プロジェクトを実施中。

(質疑応答)

Q. Google Scholarにデータを提供している出版社のリストはあるか。

A. 主な出版社の協力は得ているが、リストは提供できない。

Q. フルテキストが無い場合、文献の関連性は何で計るのか。

A. 引用状況を利用するが、その他にも指標はあり、ここでの言及は避ける。

Q. 多言語化プロジェクトについて説明を。

A. 現在、ヨーロッパの出版社と協議している。図書館の場合、著作権処理の問題解決が困難とみきわめ、まず出版社との交渉からはじめた。現在協力関係にある米・英図書館にも外国語資料は数多い。

Q. Google自身がコンテンツを購入する考えはないか。

A. 今のところ考えていない。

Q. サービスの有料化はあるか。

A. 現在の運営形態でユーザーの信頼を得ており、

それを重要だと考えている。

Q. Google ScholarでカバーするデータはSCOPUSの50%だと言われているが。

A. Google Scholarは無料でできるだけ多くの人々に情報を提供することを目的としており、SCOPUSとは全く違うコンセプトである。

Q. ベンダーからデータの提供を受ければ、Web上で情報を収集する必要が無いのでは。

A. Web上ででの情報収集の方が容易であり、それがGoogleのやり方である。

#### 4.1.3 American Psychological Association<sup>10)</sup>

PsycInfo, PsycArticles, PsycCritiques, PsycBooks, PsycEXTRAの5データベースを提供。

##### < PsycInfo >

- ・ 1887年以降200万件以上の文献データ（図書とその章、雑誌、学位論文、抄録を含む）を収録。
- ・ シソーラスあり。
- ・ 正確な取り下げ論文情報を持つ。
- ・ APAのフロントとなるデータベース。

##### < PsycArticles >

- ・ 1985年以降、APA出版雑誌を中心とした雑誌論文の全文データベース。45,000件以上の文献を収録。
- ・ 日次アップデート。

##### < PsycBooks >

- ・ 図書の全文データベース。
- ・ 1950-2003年にAPAから出版された図書618タイトル（絶版100タイトルを含む）、他出版社の古典的図書82タイトル、APA/OUP Encyclopedia of Psychologyを収録。

##### < PsycCritiques >

- ・ 雑誌「Contemporary Psychology」の後継として2005年に立ち上げ。
- ・ 毎週約20件のブックレビューが追加。
- ・ 1995年以降のブックレビューを5,000件以上収録。

##### < PsycEXTRA >

- ・ PsycInfoに含まれない、ニュースレターや新聞などへ掲載された関連分野の文献情報データベース。
- ・ レコード数50,000件以上、150,000件を超えるPDFページを収録。60%以上はフルテキストあり。
- ・ 年間30,000件が追加される。
- ・ 週次アップデート。

(価格)

- ・ PsycCritiquesは年間\$500のdata fee + platform fee, それ以外のデータベースにはFTE価格モデルを適用。
- ・ 利用にはベンダーとの契約が必要。
- ・ コンソーシアムやメンバー機関との関係を重視。
- ・ アーカイブ化は検討中。契約年度の文献については、契約終了後もサービス料を払えば利用可能。

(質疑応答)

Q. 統合データベース開発の予定は？

A. 現在のところ、その予定は無い。

#### 4.1.4 Center for Research Libraries<sup>11)</sup>

(概要)

- ・ 他所では保存されずまたは短期間で破棄される資料を中心に、保存を主目的として収集し、ILLでメンバーへ提供。
- ・ 特にNational Libraryとは所蔵資料の重複を避け、さらに5館以上で所蔵される資料は収集の対象としない。
- ・ 現在の所蔵資料数510万件。Web上で保存される画像情報等は100万件。
- ・ 2004年9月の1ヶ月間に会員に対し提供した資料件数314万件。
- ・ 昨年WorldCatに追加した目録データは63,000件超。

(価格)

- ・ 会費設定は多様で、コンソーシアムに対しては、個別にメンバーになるより有利な条件を提示。
  - ・ 2009年までに全資料の電子的提供を可能にし、地理的条件に関らないサービスを展開する予定。
  - ・ 現在の年間会員価格は下記の通り。
- \* incentive (新会員価格) は段階的に上がり、3年目はregular価格となる。

表2 CRL会員価格

会員種別		年間価格
Voting member	regular	\$43,681
	with 125 members	\$34,359
	incentive	\$13,000
Global member		\$13,000
Associate member	regular	\$8,045
	incentive	\$5,746
	with 200 members	\$3,155

(質疑応答)

Q. 電子的に提供される予定の資料には、マイクロフィルムも含まれるか。

A. すべての資料を電子化するというのではなく、要求があった資料について、電子的に送付ということである。もしマイクロフィルムについて要求があれば、それを電子的に送信する。

Q. デリバリー価格について説明を。

A. 1件\$3から。固定経費は高いが1件あたりの運用経費は比較的安く、新会員が増えても経費に対する影響は少ないので、利用件数が増えれば1件あたりの価格は下がる。

Q. 会員獲得のためのプログラムについて説明を。

A. コンソーシアム単位や多くのメンバーをまとめて会員になれば、有利な価格が適用される。場合に依り多様な割引価格が設定できる。

#### 4.1.5 Bepress (The Berkeley Electronic Press)<sup>12)</sup>

- ・ 1999年に創業した学術雑誌出版社。
- ・ 現在27タイトルの電子ジャーナルを出版。
- ・ 研究者主導の電子出版モデルを提供・支援。

< Digital Commons<sup>13)</sup> >

- ・ ProQuest社が提供している、機関リポジトリ (Institutional Repository : IR) 構築支援サービス。2004年にリリース。
- ・ Bepress社がOAIの技術を供与。

< ResearchNow<sup>14)</sup> >

- ・ Digital Commonsを発展させたもの。2005年にリリース。
- ・ Bepress社のジャーナル、IRに蓄積したものを全てをコンテンツとして利用できる。
- ・ 年間\$4,970で提供する。コンソーシアム向けライセンス料金は10%加算。

(質疑応答)

Q. NELLCO (New England Law Library Consortium) はBepressと2年間協働してきたが、話し合いはいつも頓挫した。NELLCOリポジトリの論文が商業製品に包含されるということは一切知らされなかったし、そのように使っても良いかについて打診もなかった。これはまさに商用利用である。

A. この製品は、その時点ではまだリリースされていなかった。しかし、現在、NELLCOのコンテンツは、BepressのサイトResearchNowで自由にアクセスすることができるので商用利用とはいえない。

Q. 将来、フォーマットを変更する場合、コンテンツの対応は？

A. 我々は、LOCKSSおよびCDLプロジェクトに

参画しているので、その点問題はない。

Q. Digital Commonsの契約については、誰に連絡すればよいのか。

A. Digital Commonsのマーケティングを取り扱うProQuest社へ。

#### 4.1.6 CONTENTdm<sup>15)</sup>

- ・ OCLCが提供するデジタルコレクション管理ツール。開発はDiMeMa社。
- ・ 特徴 デジタルコンテンツの対象として、写真、葉書、日記、手稿、地図、描画、ポスターなどの一次資料を扱う。
- ・ 機能 メタデータ作成、インデクシング、クエリー管理など。
- ・ 準拠 XML export, Z39.50, OAI, WorldCat

(価格)

表3 CONTENTdm価格

ライセンス	コンテンツ数	価格
自機関で保有するコンテンツを利用	8,000～無制限	初期経費 (1年目) \$7,000～44,500
		保守経費 (2年目以降) \$1,500～7,120/年
OCLCでライセンスを保有するコンテンツを利用	500～64,000	経費 \$1,200～18,000/年

(質疑応答)

Q. CONTENTdmは、他のOAI実装のリポジトリからハーベストするのか。

A. CONTENTdmは、ハーベストする側ではなく、ハーベストされる側である。

Q. ダブリンコア準拠のメタデータリポジトリがある場合、ハーベストされることは可能か。

A. OCLCはCONTENTdmだけからハーベストしているが、他のパッケージもハーベスト対象とする予定。現在は、CONTENTdmサイトののみ有効に稼働している。

Q. WorldCatがGoogleにインデクシングされるのは非常に遅い。OCLCはメタデータを使いやすい形で管理しているのか。

A. OCLCは、WorldCatに5,700万件のレコード、CONTENTdmに25,000件のレコードを保有している。YahooやGoogleが遅い理由はわからない。

Q. 価格を変更する予定はあるのか、それとも固定か。

A. 基本的にこの価格構成であるが、来年バージョン

ン4になるのでそれに伴う追加があるかもしれない。来週か再来週に詳細がわかる。また価格は、顧客が何を必要とするかによる。

Q. 直接ライセンスの場合、2年目の保守経費が高いのではないか。価格はどうやって決めたのか。

A. 価格の設定についてはわからない。

4.1.7 WorldCat Collection Analysis<sup>16)</sup>

- ・ 図書館蔵書分析ツール。図書館、図書館コンソーシアムが、個別あるいは複数の図書館のコレクションを分析することができる、オンラインサービス。
- ・ 自館のコレクションの長所・短所を把握できる。
- ・ 他館とのコレクションの比較、重複、独自性の度合の分析ができる。
- ・ 分析結果は、資料購入、除籍、分担保存などに役立てることができる。

(価格)

- ・ 年間利用料金で、利用に制限はない。
- ・ 初期経費として、OCLCシンボルごとに\$500。
- ・ 年間利用料金は、機関ごとまたはグループでのWorldCatへの資料登録数により異なる。(表4, 表5参照。)

機関ごとの価格体系

表4 WCA価格体系(機関ごと)

登録資料数	初期経費	年間利用料金
10万冊以下	\$500	\$1,000
10～50万冊	\$500	\$3,500
50～100万冊	\$500	\$6,000
100万冊超	\$500	\$8,500

グループでの価格体系

表5 WCA価格体系(グループ)

登録資料数 (グループ全体の)	初期経費	年間利用料金 (グループ単位)
50万冊以下	\$500	\$2,000
50～100万冊	\$500	\$4,000
100～200万冊	\$500	\$7,000
中略		
1,400～1,500万冊	\$500	\$44,750
1,500万冊超	\$500	要相談

(質疑応答)

Q. OCLCシンボル数100が上限という説明があったが、なぜか。多くのコンソーシアムはそれ以上のシンボルを持っている。

A. 調整する。

Q. 使用されないシンボルをはじきだす簡単な方法があるか。

A. OCLCが、個別にシンボルの利用状況を把握することは難しい。むしろ、メンバーのほうがシンボルを整理すべきであり、このツールの採用が好機となると考える。

Q. どのコンソーシアムにとっても非常に高い料金である。多くの図書館が負担を強いられる。

A. この価格体系をつくったとき、コンソーシアムの規模などその多様性を把握していなかった。これは新しいサービスであるので、価格も変わるだろう。

Q. WorldCat以外、例えば、Books in Print, Booklistと比較することはできるか。

A. 開発する予定である。

4.1.8 SpectraCRC<sup>17)</sup>

Library Dynamics社について

- ・ 1998年創業。ライブラリアン、IT、ビジネスなど各専門家から構成されるバーチャル組織。
- ・ 図書館運営や、コレクション分析用のツールを開発している。

<SpectraCRC>

- ・ 2004年リリース。図書館蔵書分析ツール。
- ・ 複数の機関と蔵書データ、利用についてビジュアル分析が可能。
- ・ コレクション、情報資源、潜在能力の把握に優れる。
- ・ 4段階の分析
  1. 大分類 22カテゴリー
  2. 中分類 250カテゴリー
  3. 小分類 6,000カテゴリー
  4. タイトルレベル 全書誌レコード

<Library Dynamics North American Title Count (NATC) Program>

- ・ 北米の図書館の全資料をカウントし、統計的データを蓄積する計画。
- ・ 1973年以来、ALAのALCTS (Association for Library Collections and Technical Services) 部門が4年ごとにNATCプログラムを実施してきた。それを2004年からLibrary Dynamics社が引き継ぐ。
- ・ タイトルをカウントするだけのプログラムであったが、Library Dynamicsのプログラムでは

表 6 SpectraCRC 価格

		資料タイトル数				
		～50万	50～100万	100～150万	150万超	
基本価格	1年	\$850	\$1,150	\$1,450	\$1,750	
	3年	\$2,550	\$3,450	\$4,350	\$5,250	
特別価格 (チャーター)	1年	設定なし				
	3年	\$1,700	\$2,300	\$2,900	\$3,500	
コンソーシ アム価格	25%未満参加	1年	\$850	\$1,150	\$1,450	\$1,750
		3年	\$2,550	\$3,450	\$4,350	\$5,250
	25～49%参加	5%割引				
	50%以上参加	10%割引				
	100機関超	応相談				

タイトルレベルのコレクション分析が可能。

- ・ 年次アップデート。
- ・ オンラインで分析結果を利用可能。

(価格)

表 6 参照

(質疑応答)

Q. データはどうやって管理しているのか。

A. 顧客がデータを我が社へ送り、MARCフォーマットで書誌レコードを管理している。

Q. 利用料金は。

A. 大学院をもつ大学 \$9,000/年  
4年制大学 \$5,000/年

このほか、初期経費\$1,000。3年契約5%割引。  
NATCセット契約5%割引。コンソーシアム契約割引は応相談。

Q. 顧客は他機関へデータを利用させることを承諾しなければならないか。

A. 情報の共有がこのサービスの根幹にあるので、Yesといえる。

Q. 雑誌もタイトルレベルか。

A. 雑誌のサービスはこれとは全く別のものである。

Q. ALCTSがNATCプログラムの使用を許可したのか。過去のデータも扱うことになるのか。

A. ALCTSがまもなくそのことについて発表するだろう。

## 4.2 全体討議

### 4.2.1 検索エンジンの比較・評価について：Web of Science, SCOPUS, Google Scholar

- ・ 検索エンジンの比較について、特にGoogle Scholarを中心に報告。

- ・ Google Scholarは、学術的な情報を対象にした無料の検索エンジン。コンテンツ対象として、雑誌論文以外に、Open WorldCatにある本、デジタルリポジトリ、Web上の論文などが含まれる。Googleのもつ検索エンジンの特徴により、他との関連性の高いものが検索結果の上位に現れる。

- ・ Google ScholarについてWeb of Science, SCOPUSとコンテンツの収録範囲、利用の利便性などについて、Yale大学における比較の結果を報告。表 7, 8 参照

- ・ Web of Scienceは年代的な網羅性において不十分な点がある。

- ・ SCOPUSは、書誌情報を統合的に検索できる。

- ・ SCOPUSはWeb of Scienceに取って代わるものではない。むしろ国際的な雑誌や科学情報(特に特許や会議録)を幅広くカバーしているので、Web of Scienceを補完するものといえる。

- ・ Google Scholarはシンプルな検索で使いやすい反面、絞り込み機能やオプション機能が十分ではない。

- ・ Google ScholarはYale大学のSFX(多種多様のデジタル資源をリンクで結ぶツール。Ex Libris社製品。)とはまだ十分同期していない。作業中だが、今のところリンク機能はほとんど働いていない。

### 表 9 参照

- ・ Web of Scienceをメインで検索し、補完的にGoogle Scholarを使うとよいと思われる。

### 4.2.2 電子コンテンツの管理について

電子コンテンツの管理について、LSR (Legal Scholarship Repository)<sup>18)</sup>を中心に事例報告。

表7 コンテンツの比較

	Web of Science	SCOPUS	Google Scholar
人文科学	1,144	×	収録されているが、詳細不明
収録範囲	1975-		不明
自然科学	5,900	11,300	収録されているが、詳細不明
収録範囲	1900-	1966-	不明
社会科学	1,725	2,700	不明
収録範囲	1956-	1966-	不明
英語以外	ごく少数	あり (英語抄録のあるもののみ)	あり
雑誌記事	あり	あり	あり
Open Access J	191	531	Directory of Open Access Journals (1,400+)
Book	monographic series のみ	収録文献に引用された場合のみ	OpenWorldCatを通して
特許	×	あり	-
レポート	×	Medlineに収録されているか Webで公開されているもの	いくらかあり
会議録	×	750	いくらかあり
シンポジウム	×	Medlineに収録されているもの	Medlineに収録されているもの
Web情報	×	あり	あり
索引	×	Pubmed, Embase, Compendex	Pubmed

表8 検索その他特徴

	Web of Science	SCOPUS	Google Scholar
検索初期設定	フレーズ検索	単語のAND検索とみなされる。 フレーズ検索には"が必要。	単語のAND検索とみなされる。 フレーズ検索には"が必要。
引用文献の検索	引用文献がWOSにインデックスされていない場合、誌名・著者・巻年ページのみをCited Refで確認することになり、タイトルなどは含まれない。また他のデータとのリンク関係もない。	引用文献がSCOPUSにインデックスされているかどうかにかかわらず、検索結果には書誌情報が含まれる。また他のデータとの引用リンク付けがされている。	引用文献がGSにインデックスされているかどうかにかかわらず、検索結果には書誌情報が含まれる。また他のデータとの引用リンク付けがされている。
結果表示順	年代順	年代順	GSアルゴリズム
並べ替え	可。(出版日, 引用回数, 関連度, 著者, 誌名)	可。(関連度, 著者, 誌名, 引用された回数)	不可
絞り込み	可。言語, 日付等	可。誌名, 著者, 出版年, Document type, 分野 (8分野)	Advanced Searchで可。(著者, 誌名, 出版日)
かしこい機能	ワイルドカード検索	自動的に単数形・複数形・所有格・関連語を合わせて検索	自動的に単数形・複数形・所有格・関連語を合わせて検索。正しいスペル・異なったスペルの照会。
アラート	あり。トピック, 著者, 指定の文献が被引用文献となった場合。	あり。トピック, 著者, 指定の文献が被引用文献となった場合。	なし
検索結果の選択・保存	可	可	不可
履歴の表示	可	可	不可

表9 Yale大学のリソースとの統合

	Web of Science	SCOPUS	Google Scholar
SFX	全件リンク	全件リンク	一部リンク
Metalib	あり	あり	開発中
Endnote	直接エクスポート	直接エクスポート	なし
RefWorks	セーブ後インポート	直接エクスポート	なし

- ・ NELLCO は、1982年に創立されたコンソーシアムで、電子資源の契約事務、ILL、バーチャルレファレンスなどを行っている。
- ・ LSRについて、Bepress社との取組を、2002年ICOLC第12回で報告済み。
- ・ NELLCOとの取組について、2003年から、5図書館の協力を得て実施、82のペーパーを公開した。
- ・ 現在の参加は、12図書館、301のペーパーを公開、2005年以降で26,381件ダウンロード実施がある。

#### (LSRの価格)

- ・ 全体で\$18,000/年。
- ・ NELLCOが\$10,000払い、残りを加盟機関で等分割する。

#### (LSRの将来計画)

- ・ 博士論文を増やすこと、雑誌を自社で生産すること、学生の作り出すコンテンツを収録すること。商業出版とは異なることを強調。

### 4.2.3 電子ジャーナルの変容と諸問題について

- ・ 日本の大学図書館における電子ジャーナルおよび外国出版社に対する支出と予算について報告があった。
- ・ 電子ジャーナルに関する現状分析とそれに関する諸問題が提示された。
- ・ オープンアクセスジャーナルについては、その考え方に賛同し協力はするものの、期待するばかりでなく図書館側でもアクセスツールを開発するなどの積極的関与が必要との意見が出た。
- ・ 資料保存についてはLOCKSS<sup>19)</sup>が議題となり、実験的要素はあるものの非常に価値あるものとして認識された。
- ・ 地域ごとの資料保存について、次回も引き続き討議することを承認した。
- ・ 時間の関係で討議には至らなかった他の重要な関連議案が提示され、今後継続して検討することが同意された。

(本セクションでは、千葉大学附属図書館長の土屋教授が、わが国の現状への言及を含め、モデレータを務められた。)

### 4.2.4 統合検索エンジンについて

各種統合検索エンジン (federated search engine) について評価・分析と現状の報告。

#### ① Michigan eLibrary<sup>20)</sup>

- ・ Michigan eLibraryは、デジタル資料、総合目

録、ゲートウェイ (INN-reach・Metafind・Webridge) などの利用を簡素化することを目的に、1997年から政府援助とデータベースアクセスを得て始まった統合検索エンジンを含むプロジェクト。

- ・ 重複データ除去の不適切さ、関連度によるランキングの難しさ、検索スピードなどに問題が残り、結局Googleには及ばず。
- ・ 検索対象を絞り込む形のポータル利用がより望ましいのではないかと結論に達した。

#### ② WebFeat<sup>21)</sup> (Ohio Public Library Information Network, OPLIN)

- ・ OPLINに加盟する公共図書館は、複雑なものではなく、とにかく結果を出してくれる検索エンジンを求めている。
- ・ 遅くても効果的で、比較的応答性がよく、どんな形式でもよいから検索を実行し、並べ替え・重み付け・重複除去などが行われないう理解のもと、WebFeatを採用。
- ・ その結果、利用は増加、検索リクエストや資料の利用も毎月増えている。ただし、解決しなければならない問題も多い。

#### ③ Metasearch<sup>22)</sup> (California Digital Library)

- ・ 1997年に自己開発から始めた統合検索エンジンの設計だが、2002-03年に商業製品が登場、2004年までにはMetalibがインストールされバージョン3まで開発が進んだ。
- ・ 現在CDLが提供しているのは学部生用とヨーロッパ研究用のプロトタイプモデル2種であり、また一方で、NSDL (Geology) (National Science Digital Library (Geology)) と Hewlett, American West Project内においても試行実験中でもある。
- ・ 分野を幅広く捉えるかそれとも絞り込むか、網羅性とスピードのどちらを優先するか、手を広げるか深く追求するか、ユーザーが求めているサービスとは何でどこまで必要なのか、などの問題が未解決である。

#### ④ 報告：統合検索エンジンに替わるもの (NELLCO)

- ・ Franklin Pierce Law Center<sup>23)</sup> のワーキンググループでWebfeat, Muse, TDNet, Metalib, Sirsi, Endeavor等の統合検索エンジンを検討。
- ・ 問題点 検索結果が刻々と変化すること、スピードの遅さ、重複データ除去の貧弱さ、関連性によるランキングに関わる問題、サーバーへの過負荷、設計思想に関する文書が存在しないこと、法学関係情報が存在しないことなど。



- ・ Google検索アプライアンスは、内部ドキュメント検索用に開発されたハードウェアとソフトウェアを組み合わせた製品で、コンテンツプロバイダーからコンテンツを取り込む前に、検索用インデックスを作成する。すでに作成された検索用データセットを対象として検索するので、より良い検索結果をすばやく入手することが可能。関連性によりランキングされ、重複データ除去も行なわれる。価格は対象とするドキュメント数による。
- ・ Google方式では、検索スピードが速く、「法学関係」データベースがオンライン化される前に検索が可能で、ベンダーサイトには無駄な検索による負荷をかけず、コレクションを作成・管理でき、インデックスを作成するタイミングもコントロール可能である。その製品は自社管理となる。
- ・ 現在、Googleと協議を始めたところで、他に2つのベンダーが関心を持っている。コンソーシアムとして、取り纏め役的働きをすることを考えている。

(質疑応答)

Q. Metasearchは高額だが、Googleの価格は？

A. Google Scholar applicationの最低価格は\$32,000。1,500万件まで検索対象を増やすと\$1,500,000になり、この価格については見直しが必要と考える。

Q. ベンダーからはどのような許可が必要か。

A. よく協議の上、ライセンス条件を遵守し、ベンダーが納得のできる方法をとることが必要だ。

コメント：Rochester大学は、利用しやすい統合検索システムとは何かという観点から、ユーザーの研究活動に着目し、「使い勝手の良さ」について調査研究を実施、現在、オープンソースシステムを構築しつつあり、大変参考になる。

Q. (Michigan eLibraryに対して) なぜ単一のインターフェースであることが重要なのか。一般利用者向けと研究者向けではインターフェースが異なってもよいのでは。

A. その方がふさわしいだろう。

Q. スピードとシステム効率を優先するなら、データの統合や重複チェックはあきらめてもよいのでは。

A. NISOに従って統合検索をおこなうためには、大きな課題のひとつだ。ベンダーはデータの統合により自社のレコードが独自性を失うことをおそれて、反対している。

コメント：Googleは図書館の情報資源を利用してはいるが、検索の際に大量の同時アクセス数を占有してしまうので困っている。

問題点：開発した統合検索エンジンを最初のステップとして利用してもらうにはどうすればよいのか不明である。そもそもこれらの検索エンジンがユーザーのニーズに一致するかどうかも定かではない。

### 4.3 テーマ別討議 (Split Session)

#### 4.3.1 利用者ニーズと満足度の測定について

事例報告3件および討議。

##### ① Auburn University (Alabama, US)

- ・ LibQUAL+<sup>TM 24)</sup> を利用した大学図書館評価。他機関と比較して自館への期待と実際について調査。
- ・ 所蔵雑誌について期待と実際にギャップがあるものの、通常範囲内と考えられる。
- ・ 研究者は参考業務担当図書館員の知識は不十分と評価したが、外部から取りまとめ役を招いて討議した結果、図書館員と専門知識に関して不満感との関連は見られなかった。
- ・ 最も問題視されているのは資料配置で、プロジェクトを立ち上げ解決を図っている。最初の調査結果にはよい反応があったが、3年後の結果にはほとんど反応がなかった。NAAL (Network of Alabama Academic Libraries), AVL (Alabama Virtual Libraries) との関係については、調査結果には何も現れていない。

##### ② Council of Federal Libraries (Canada)

- ・ 将来計画立案のため、145の会員に対し、コミュニケーション・ベンダーとの契約・要求事項について調査をおこなった。回答率は70%で、各図書館は調査にかなり協力的。
- ・ 将来計画・コミュニケーション・国立図書館に対する資料購入と資金確保についてのニーズが具体化した。

##### ③ University Grants Commission, Information & Library Network (India)

- ・ 電子ジャーナル3,500タイトルに対する無料アクセスを100大学に対し提供し、その反応を調査した。当初3年間の費用は、インド政府から補助。
- ・ アクセス環境の整備、追加するジャーナルの調査、他コンソーシアムから利用者への情報供給手段の習得、アクセス対象増加のために大学側がどこまで資金を出すかなどを調査し、回答率は50%であった。

(討議)

- ・資料の分担収集には各館から年次報告書と共に利用者満足度についての情報提示が不可欠。
- ・調査は記名か匿名かについて議論の余地がある。
- ・調査ツール、調査へ参加する動機付けなどを考える必要がある。
- ・ディレクターによる電話での聞き取り調査はPRになり、提供される情報も多く、図書館運営側にとっては自館の問題以外にも関心を向ける好機となる。
- ・モデレータから下記の参考文献が提示された。Roger Strouse "Demonstrating Value and Return on Investment : The Ongoing Imperative" (Information Outlook, March 2003, pp. 14-19)

4.3.2 コレクション分析について (事例報告)

- ・雑誌の分析プロジェクトについて事例報告。
- ・それぞれの雑誌を、コンソーシアムに属する図書館のうちいくつかの図書館が所蔵しているか、という分析を行った。その結果、所蔵機関が少ない“危機的状況”にある雑誌が非常に多くあることがわかった。

4.3.3.資料の共同保存について

資料保存に関する諸問題と各館の現状が討議され、共同保存書庫は特に3つ以上の機関で共同運用される場合有意であるとの見解でまとまった。

4.3.4 Big Dealの教訓 (事例報告)

事例報告が2件。

①CDL (California Digital Library) と Elsevier 社 (以下「E社」という。) の事例報告。

- ・CDLは10キャンパスにわたり計1,200タイトルのジャーナルを管理している。E社とは5年の取引実績。
- ・カリフォルニア州の緊縮財政で、\$10億予算減。
- ・CDLはE社の顧客規模としては世界第2位。特にUniversity of California (以下、「UC」という。) はE社のジャーナルの50%に関係している。
- ・コンテンツを減らさず、コストを削る、価格維持の模索。
- ・出版社合併によるコスト増、タイトル数増は認めない。
- ・歴史的価値ではなく現在における価値を基に見直す。

- ・E社について、財政、株式市場、給与・賞与など徹底的に調べ、交渉時に使った。
- ・UCについて、経費、利用を徹底的に調べた。電子ジャーナル予算の50%、電子ジャーナルの利用の25%をE社が占めた。
- ・交渉は順調にいった。UCの総長がE社を呼ぶ、デモンストレーション、新聞メディアから圧力、交渉コンサルタント、などで交渉を有利にすすめた。
- ・交渉結果。自己基金、救済措置条項を契約に盛り込む、バックファイル購入のための外部基金を用意する、5年契約で料金変動を5%以内に抑える、タイトル交換による年経費固定、などの条件を獲得した。
- ・目的は達成したが、膨大なタイトル管理という作業は残った。
- ・幹部会議でタイトル管理に取り組んだ。あるジャーナルがオープンアクセスへ移行すればCDLもそのジャーナルをオープンアクセスとし、E社の契約内のジャーナルのタイトル交換を行う。選定にはCDLの各キャンパスの代表30人のライブラリアンが集まる。106タイトルで50%の利用があるので、タイトル管理は重要である。
- ・コメント 各キャンパスのライブラリアンが、コンソーシアムの視点で考えることの重要性を認識した。

②OhioLINKとElsevier社、Blackwell社、Springer Kluwer社の事例報告。

- ・E社ジャーナルの利用は2003年から横ばいで、他出版社ジャーナルの利用が上回った。
- ・E社はジャーナル経費の40%、利用の40%で妥当といえる。
- ・One-size-fits-allアプローチという選択をした。これは適切な利用に対する適切なコストという考え方である。つまり利用だけが指標である。
- ・ベンダーは値上げに慎重になった。
- ・OhioLINKはベンダーに対して、長期的に取引したければ価格高騰を抑えることを要求し、それができなければ取引量を減らすか立ち去ってもらう、と宣言した。
- ・他の大手出版社電子ジャーナルに対しても同様に主張した。
- ・結果、コンセンサスが生まれた。複数年契約でも問題はないとの認識も生まれた。
- ・Blackwell社、Springer Kluwer社は4%タイ

トルカットした。出版社はこれ以上のタイトル減少を避けるため、契約を更改した。必要が生じれば後にタイトルを増やすこともありうる。

- ・従来の冊子体の雑誌の契約とは全くスタイルが異なる。利用を判断材料としてコストを決定するしくみを構築した。
- ・参考文献 Jeffrey N. Gatten et al. "An Orderly Retreat from the Big Deal: Is it Possible for Consortia?" (D-Lib Magazine, 10 (10) October 2004)
- ・コメント 条件交渉がまとまらない場合、契約中止も考えるべきである。TRLN (Triangle Research Libraries Network) は実際契約を断念したが、所属員からの苦情はなかった。またその事実が、他出版社との交渉の際、有利に働いた。

#### 4.4 運営会議 (Business Session)

##### 4.4.1 ILL Paper

資源共有またはILLの現状認識と将来的な見通しに関する意見書<sup>25)</sup>をまとめたのでコメントがほしい旨の要請があった。

##### 4.4.2 ICOLC MARC Records Standards for E-resources

電子資源MARCレコード規準の改善についてICOLCから協力要請。

##### 4.4.3 Stanford Encyclopedia of Philosophyスタンフォードオンライン哲学百科事典<sup>26)</sup>

実績、価格などについて報告、提案。

##### 4.4.4 COUNTER<sup>27)</sup>

電子資料の利用統計規準を作成。作成中の電子ブックの利用統計規準について協力要請。

##### 4.4.5 ICOLCの国際化

米国や欧州以外 (例えば、アジア地域) での開催地の可能性、各地域でのコンソーシアムの状況などについて討議。

##### 4.4.6 今後の大会運営について

今回は2005.9.29-10.1 Poznan, ポーランド<sup>28)</sup>。次々回は2006春, Philadelphia, 米国。

#### 5. 終わりに

今回のICOLC会合では、これまでのような電子

ジャーナル関連の新商品の概要・プライスマodelの提案などを内容とした「グリル」主体のセッション構成ではなく、電子コンテンツの保存や管理、各館のコレクション分析、紙媒体資料の共同保存あるいは保存書庫問題、利用者の満足度調査の意義、といった本来的とも言えるテーマに焦点が当たっていたという印象である。

その一方で、電子ジャーナルを中核とする学術文献を取り巻く環境の変化、特に、オープンアクセス化の動向などが議論の対象となっはいたが、世界的に起こるさまざまな関連事象を網羅的にトレースしながらも、学術情報社会がいったいどちらの方向へ進もうとしているのか、具体的な方向性を示すまでには至らなかったように思う。

わが国としても、この重要な時期に、世界動向の適切かつ継続的な把握に努めるとともに、コンソーシアム活動の方針設定を誤らないためにも、今後のICOLC会合への関係者の派遣など、世界レベルにおける積極的な関わりを望みたい。

#### 注・参考文献

- 1) International Coalition of Library Consortia ICOLC. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.library.yale.edu/consortia/>), (参照2005-08-22)
- 2) ICOLCボストン大会. (オンライン), 入手先 (URL [http://www.nelinet.net/edserv/conf/special/icolc/gen\\_info.htm](http://www.nelinet.net/edserv/conf/special/icolc/gen_info.htm)), (参照2005-08-22)  
なお、ICOLC会合は2004年から、春会合が米国、秋会合が欧州と年2回の協調開催となり、今回の会議から回次は付与されていない。
- 3) 尾城孝一. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第12回会合報告. 大学図書館研究. No. 67, 2003, p.28-36.
- 4) 尾城孝一, 松本和子, 井上 修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第14回会合報告. 大学図書館研究. No. 71, 2004, p.49-55.
- 5) 前田弘子, 青木堅司, 井上 修. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第15回会合参加報告. 大学図書館研究. No. 72, 2004, p.58-68.
- 6) 山本和雄, 市古みどり. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 第6回欧州会合参加報告. 大学図書館研究. No. 74, 2005, p.74-80.
- 7) SCOPUS. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.scopus.com>)

- //japan.elsevier.com/products/scopus/), (参照 2005-08-22)
- 8) Google Scholar. (オンライン), 入手先 (URL <http://scholar.google.com/>), (参照 2005-08-22)
- 9) Google Print. (オンライン), 入手先 (URL <http://print.google.com/>), (参照 2005-08-22)
- 10) American Psychological Association. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.apa.org/>)
- 11) Center for Research Libraries. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.crl.uchicago.edu/>), (参照 2005-08-22)
- 12) Bepress (The Berkeley Electronic Press). (オンライン), 入手先 (URL <http://www.bepress.com/>), (参照 2005-08-22)
- 13) Digital Commons. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.umi.com/proquest/digitalcommons/>), (参照 2005-08-22)
- 14) ResearchNow. (オンライン), 入手先 (URL <http://demo2.bepress.com/researchnow/>), (参照 2005-08-22)
- 15) CONTENTdm. (オンライン), 入手先 (URL <http://contentdm.com/>), (参照 2005-08-22)
- 16) WorldCat Collection Analysis. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.oclc.org/collectionanalysis/>), (参照 2005-08-22)
- 17) SpectraCRC. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.librarydynamics.com/spectra.htm>), (参照 2005-08-22)
- 18) NELLCO Legal Scholarship Repository (LSR). (オンライン), 入手先 (URL <http://lsr.nellco.org/>), (参照 2005-08-22)
- 19) LOCKSS. (オンライン), 入手先 (URL <http://lockss.stanford.edu/>), (参照 2005-08-22)
- 20) Michigan eLibrary. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.mel.org/>), (参照 2005-08-22)
- 21) WebFeat. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.webfeat.org/>), (参照 2005-08-22)
- 22) Metasearch. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.cdlib.org/inside/projects/metasearch/>), (参照 2005-08-22)
- 23) Franklin Pierce Law Center. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.piercelaw.edu/>), (参照 2005-08-22)
- 24) LibQUAL+™. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.libqual.org/>), (参照 2005-08-22)
- 25) ILL Paper. (オンライン), 入手先 (URL [http://www.dynix.com/institute/attach/Bailey-Hainer\\_Wanner\\_20050601.pdf](http://www.dynix.com/institute/attach/Bailey-Hainer_Wanner_20050601.pdf)), (参照 2005-08-22)
- 26) Stanford Encyclopedia of Philosophy. (オンライン), 入手先 (URL <http://plato.stanford.edu/>), (参照 2005-08-22)
- 27) COUNTER. (オンライン), 入手先 (URL <http://www.projectcounter.org/>), (参照 2005-08-22)
- 28) 次回会合 2005.9.29-10.1 Poznan. (オンライン), 入手先 (URL <https://www.pfsl.poznan.pl/icolc/>), (参照 2005-08-22)

---

< 2005.8.23 受理 ふじた よしまさ 島根県立大学  
メディアセンター司書, しょう ゆかり 広島大学  
図書館医学分館, いのうえ おさむ 東京工業大学  
学術情報部情報図書館課長 >

**FUJITA Yoshimasa, SHO Yukari, INOUE Osamu**  
**Report of the International Coalition of Library Consortia Boston Meeting**

**Abstract:** Representatives from Japanese academic libraries have participated in the 12th (Nashville), 14th (La Joya), and 15th (New Orleans), and now the 16th (Boston) North American ICOLC meetings, as well as the 6th European Conference (Barcelona). This time debates focused on bibliographic information databases, preservation and management of digital contents, collection analysis of individual libraries, shared storage of print materials and issues relating to storage facilities, the significance of measuring library user needs and satisfaction. Participants also discussed how the movement towards open access affects the scholarly material environment, particularly that of e-journals. These issues are summarized in this report.

**Keywords:** library consortia / International Coalition of Library Consortia / ICOLC / digital information resources / bibliographic databases / institutional repositories / collection analysis / e-journals / open access journals / shared resources